茶道筌蹄　三

458

茶道筌蹄巻之三

目録

眞壺　小道具

香爐

床飾具

書院飾具

釜作者　釜名

同敷

釜蓋

ツマミ

鐶付

宗甫

釜添品目

炭取　小道具

炭品目

炮烙　半田　灰杓子

風炉　土　金　鉄

同作者

同灰　同敷板

炉縁

香合

薫物

花入　同敷板　小道具

茶道筌蹄巻之三

○真壺之部

呂宋　むかしハ是非共壺へ茶詰貯へしゆゑ支那へも壺あつめ者無口切の茶の湯なるゆゑさぶらひしとするも呂宋を上品と次豊太閤の時代共壺をもとめ申し候ゆゑ世人世間にすくなく不足なる故に依て左海の納屋助左衛門太閤の命をうけて呂宋へわたり壺五十をとり来る利休是が品位を定め諸侯へわかちしなり

蓮花王　呂宋の上品にして蓮花の上に王の文字あり

清香　是も呂宋の上品なり清香の文字あり

瀬戸

信楽　千家にて八此三品 呂宋 瀬戸 信楽 を用也

○口小道具

口覆　紐　數緒　乳緒　長緒 古行　取緒

口緒　右何れも習事の内也人々好ミ従ひ組と乳緒

長緒を用ゆる事千家ニてハ陰流高ら〳〵絡ふ

口切茶 桐二重茶　小刀　美濃紙 杉原一枚ニても　封板 桐　箆 竹

壺の口張切るを初め箆にて筋を入れ其所を小刀にて

切り美濃紙の上へ茶を壺より出し葉茶濃茶の

袋張撰出し葉茶ハ美濃紙より茶漏斗(ジヤウゴ)へ移し

漏斗(ジヤウゴ)より壺へ入れ封板にて封じ紙ニ糊(ノリ)を付るを

壺の口張り我印を押なり

茶茶漏斗　桐にてしつらふしと細く次

茶中入茶　桐にて濃茶十矢との茶入茶ニ付茶を詰る

またハ此茶入のことなり

○香炉之部

床飾之具

書院飾之具

金　青磁　染付　国焼　井戸　三島　楽焼

何れもむかしよりある物を用ゆ

三具足　唐金 楽焼　東山殿御物中央唐金縄耳の香炉右

青磁鶴首(カブラ)の花生左青磁蠟燭立

○宗旦好の三具足ハ青磁蠟燭立楽にて写し中央ニ

赤楽の線香立燭ハ青楽仝入の花生なり○東山殿

御物の写しも楽焼にあり

香板　黒塗横へ長く上に鐶あり紀録とうれ香板と
三具足の臺に後用るなり鐶頭に注し、

卓　青貝　堆朱　和物　ある獣の香炉ハ金出とも床へ出す
並く　板まても畳まても　併し畳床まて出るく小さきハ丸香臺を用ゆ
格合出並まてハ悪し紀也へなり
○利休不持ハ卓様へ長く鳥居卓の紙さ板ある
掛まて黒の花塗なり

冠机　利休所持黒塗長角四方ノ柱あり紫の総(フサ)
急なるなり

香炉臺　アラメ　松木溜　原叟好アラメ黒爪紅足に香狭間(サマ)

あり啐啄好松木溜原叟好とす法同し

線香立　唐物　和物　千家所持跛跡の麒麟飾線香の時ハ
香合と用ひ香炉も空炷ハ香合と用ひ左灰押銀葉
の上に香炷きて火と入れ

硯箱　利休形四方カケゴあり
上の重に茶柄の小刀　同錐　桐封板　白元結(モトユヒ)二尺　当時不用
下ハ角急の硯　楽焼結文(ムスビブミ)梅の燈籠の水入　香炉茶之　茶柄
の筆一對　但し一本ハ帽子あり一本雲付にする
○利休形と一閑に仕るハ元伯好なり
○松木溜塗ハ原叟好文蛉と老松まて造る
○文蛉ハ元伯好なり長角まて蛤端黒塗玉室和尚の

書すを文蛤の二字を金粉にて蒔たる一閑張の長文庫也
とり合ハ

文庫　利休形桐ヤロウ蓋菓の絵あり

閑張物（ヒラキ）　蓋の裏に秋海棠の絵表に小菓の絵ある
利休形裏にサヽゲ表に大菓の絵ハ元伯好なり

山焼　千家所持隅テヽビヽ指蓋の裏に山焼の絵ある形
人物はりゑ朱唐物なり此ハ無桐朱地テヽビヽ指
無紋なり

長一閑張　元伯好文蛤に添ふ
〇文庫を用ひざる時ハ秋草を二折ワナとなし
かけ其上に硯箱を置く

机　利休不審菴今日庵伝来也

雉盃　唐和　竹を柄に好白竹二ツ割脊合せ摺漆

竹篦（ヘラ）　如心斎床飾に用也大徳の書まて祖佛共殺と
欹入（コンジヤウ入）裏溜塗紅緒口ツ共床の二ツ割一ツ分
據手の方へまとく魚緒ハ容付

喚鐘　撞木　紅の緒撞木利休形葉茶口ツ共の緒

面　二三光小面を用也付書院に向て左の方に懸る撞木無
向て左に銅鑼の撥ハ向て右に懸る但し鐘懸るとき無
右の方撞釘二本共ヒラキ一すまを於なり

供茶具　元伯好ハ一宗張小壷二ツ一宗張の五盃袋を焼切し
茶地唐草襷腰の純子と二ツなり　濃茶袋ハ茶地の方　薄茶袋ハ襷腰の方

○所〻数好ツボく棗袋ハフウツウの玉と呼ぶ地金摸の
玉を二ヶ用ゆ一閑張七子り縁の盆に乗く（濃茶器呼ぶ地の方　薄茶器ハフウツウ）
盆山　葛盆　千家所持盆石の銘元伯ニる然輝七夕を
山中氏所持。盆石お根ハ葛盆に王石を置砂大小
とりまぜバラリと蒔すり（ニる然輝ハ山水書名之　七夕ハ山中右作所持）

○釜作者之部

芦屋　筑前明恵上人始て釜を命じと以ふ
天猫　小田原河内天猫ハ茶釜师に行くじ（河内天猫ハ文字天明之）
関東　天猫の脇作其外江戸作と一同に関東作と以ふ
天下一西村道仁ハ紹鴎の釜师すり与二郎の师と以ふ
紹鴎好さく川と以ふ釜行り銘物すり道仁の作

与二郎　利休の釜师すり辻与二郎実久と以ふ弟子ろり
弥四郎　尾左衛門と以ふろ行り上よ於て人ハ釜师をも此名人
の作を与二郎と極む法名一旦
浄味　先祖を名護屋越前入道善正と以ふ東山時代
然後詳ならじ子孫に至て大仏の鐘を鋳る者を初代
浄味と以ふ○此大仏の鐘始め与二郎へ被仰付し所
鋳損し大津の辺へ逐電（チクテン）し其後入道しても一旦と云
其の作よ雲龍の焼筑行り今妙法院御宮行り
依て鋳ましめ今の大仏の鐘ハ初代浄味の鋳る所也
二代浄味　昌堂斎と号じ
三代浄味　二典と以ふ原叟时代すり二三典浄味ハ世俗に云

足切浄味是なり是より後ハ庄兵衛代〻相続ス 但し浄味の男子なり
初代より今にいたり（常）此印を用也

道弥　道仁の弟子をし大西弥一郎と云て江岑同時代之
此名に道運　道有ありり不詳

道也　道弥の子弥三右衛門と云て後道治と改む原叟同代

道爺　道也の子弥二右衛門と云て原叟同時代より如心同時代へ
かけて百陀達广堂ハ原叟好累坐富士ハ如心好なり

寒雉　初代浄味弟子宮崎彦九郎と云加州利長公へ
召出御釜師と成る 其家今にいたり此寒雉の事ハ別録に委し

九兵衛　西村九兵衛と云て道弥親類元伯同時代なり

浄林　姓ハ大西浄味の弟子なり

浄清　浄林の弟なり兄弟とも織部公に随て関東へ
下り浄林ハ江戸にて足をとゞめ御釜師と成る浄清ハ
京へ帰りて住ス

浄元　浄清の子なり

浄頓　浄元の子なり

浄入　浄頓の子なり

浄元　浄入の子なり此人より道爺死後千家へ
出入の釜師となれり

浄玄　浄元の子なり啐啄斎時代

清右衛門　浄玄の子也早世故弟子奥平佐兵衛家を嗣

浄元　奥平佐兵衛了雲入道と以て其子清右衛門大

西姓ノ偏ハ

佐玄濤　奥平氏了雪入道の弟なり

浄西　大西氏

頓入　廣瀬氏

。初の名井上氏　後の名細野氏　佐玄濤か大甥

○釜の銘之事

浄味　浄元ゟモミの竪目ニ書ル

寒雉　桐の竪目ニ書ル

道也　モミの横目ニ書次

道爺一代ゟ　桐の横目　何れもサン蓋なり

○釜の蓋

モリ蓋ゟ　阿弥陀堂　尤釜

薄モリゟ　尾張

スクヒ　エメウ蓋　細路小霰の類　〜一文字共蓋石目

○釜のツマミ

花の實　梅の花と二ツ合せたる也

透茄子　山梔子(クチナシ)　鋳ヌキツマミ　俗ニ業鋳蓋といふ

鋲椎ツマミ　環ツマミ　俗ニカキタテツマミといふ

○環付

鬼面　鉦鞁耳　遠山　アマツラ　蔓の事なり　松カサ

茄子　サイ　責紐の事なり

○釜敧之辨

真形　ミコロ相くさの法を鶴首表形といふ芦屋
天猫に多し其後さゝ此写しあり古作也人好者まゝ
底に煙返しといふて細き輪あり
透木　イロリ透木釜古作ハなかりし原叟好ニ乙御
前あり庸軒より始てアラレ富士釜にあり
鶴首　名物の鶴首ハ八寸利休形ハ是より小さし鶴
首風呂ハ名物の方を参考して見ゆるか也人利休形乃
釜ハ少し大ブリなり利休形鶴首ハ石目蓋真
鍮平鐶なり古方ともケキリなり
責紐　天猫始之貴人へ献茶の茶口封印を付るをせめく
小霰　紹鴎所持のうつしなり是ハ茶亭の鐶付山

梔子ツマミ煙カヘシあり
乙御前　信長公御所持　加州侯御所持○信長公御
因へ改あり繍て是其時の狂哥に
乳多に高き形しその焼口を
人に吸さんず押しみせよ
此釜の写しを加州侯御所持也人宮の雛の形と云を
もとへし 作し環付鬼面あり 天猫に輪口あれども焼口をよしとし
百會　利休百會に用ゆ天猫作焼口霰鬼面の鐶付
唐金の薬モリ蓋歯同ハ松山侯御所持なり
鮀
百會に似て肩に張ありて鮀目ある也人ナタ釜と云
環付鬼面天猫作利休所持なり歯同加州侯之御所

蔵ありしを雛の作といふ

大講堂　作不知叡山大講堂の香炉と釜ニ鋳付たる
物なり大講の文字右より書出したるも左より横ニ書出
せし物も有り本寿ハ御物なりしが明暦ニ焼失し
たる由人不明廣口共蓋常張鐶

唐犬　宗旦所持天猫作共蓋一二味鐶耳あるゆへ見
立てて唐犬釜といふ勢州神戸彦衛所持

針屋　芦屋作針屋宗春所持コシキの肉雷紋あり
鐶ツキ遠山

万字　天猫作雷紋と卍字と交りし紋也大徳寺形と云
卍字のこと何ちハ八寸数云表ニ泉州中尾宗古所持の写し也

野溝　天猫作廣口指木ニ猿猴の摂揺鐶付玉壺底
金蓋野溝某所持せしゆへ野溝といふ

地蔵堂　遠州釜胴ふくしよくツル輪口鐶付鬼面底
全蓋無地尾州地蔵堂の常住釜なり天猫作也
小田原陣の時利休ニ出し小田原風呂え（小田原陣中ヘ持行し風呂之）取
合せしとぞ

東陽坊　天猫作筒釜鬼面鉄のカケゴ蓋あり底
ケキリ表線の丸鐶利休所持せしが東陽坊へ送
られし故ニ東陽坊の名あり

蒲団　利休所持せし二郎作輪口鬼面底全蓋伊豫西
條彦衛所持せしといふ

切合 世ニ云切懸と云 墨子風炉が始りなり其余多く有り
廣口 古作ニ多し道安好ミ与二郎作すそ輪口と
姥口と有り
皆口 天猫より有り好あし
姥口 口作り老女の口ニ似たる故也ニ云
十王口 輪口の上乃少し開くを云十王の冠乃形ニ
似たる故ニ名づく
丸釜 利休形与二郎作輪口底金蓋鬼面環付
尻張 利休形与二郎作一名泥障(アオリ)釜と云
阿弥陀堂 利休此釜の大の方を有る阿弥陀坊へ好ミ
堂尻丸釜尻張阿弥陀堂の三品大中小有れども大

と小と殊よろしとす
○原叟好阿弥陀堂ハ小の阿弥陀堂ニ中の阿弥陀堂
口を浅くなして家所持の蒲団釜の蓋を兼用也
三典浄味作なり
國師 春屋國師所持与二郎作當時山中氏所持
國師丸と云ふ
日の丸 自然と丸き出来故名付くと二郎作三井
元ハ勘所持
四方 クリ口鬼面真鍮の平環蓋被(カツキ)ノ多く切懸ケ也又ハ
少庵好小ハ元伯好共蓋摘ツマミなり當時ニ浅し
大ハ石目蓋なり古作ハ共蓋と底金石目花乃実

鑄ヌキツマミもあり又唐金蓋もあり

萬代屋(モヅヤ) 天猫作万代屋宗安所持銘一種せしといへども

廣口鬼面輪口肩に筋あり累座のあるとあれども

雲龍 利休形与二郎作地紋雲龍カケゴ蓋ハ共蓋

大ハ切子ツマミ小ハカキ立鐶付鬼面少庵好ハ

鬼の鐶付なるを大計なるを小ハ無し 何れも共蓋丸鐶仙叟

好ハ小なるを少し形の古張之鐵銘好ハ中なるを 龍に開也

いづれもアゲ底也

龍釜 与二郎作鐶付龍に似たり丸釜の少し高きなり

桝釜 利休形四方釜の肩が落ちたる胴落鑵(カンギ)によるなり

されどあり大小あり

巴蓋 少庵所持霰平釜切カケ鐶付鬼面天猫作共蓋ハ

少庵好巴の地紋ある山中氏所持なり

土斎 宗旦好之古跡へ好まれたり元来天猫作底を

九代浄味作唐金モリ蓋銘山斎御所蔵なり

四方口 元伯好元来天猫作底代ヲダレしたる代に鬼面

共蓋元伯より探幽へ贈る足切浄味写しには刀豆

鐶付なり千家にはる鬼面を用也

裏鏊(ウラガウ)(イリナベ) 裏合 裏鏊などゝ [illegible] 鏊の文字あるを元来イリナベとおもへしを 元伯好元来天猫作

の鏊の底乃かんなるにあるを代々ある々しをり更にある底を

四方の鐶付なり

累座 元伯好元来天猫作の大釜代々の為(タメ)に底代

切上ゲ口あり クリ口四方座鬼面唐金フタ山中氏

阿弥陀堂 但し俗に座阿弥陀といふ

立鼓 元休好瓢箪とひつくるめしうちなる猫なり元休

阿弥陀堂天猫作世にいふ覃瓶釜に似より

腰万字 原叟好丸釜切合せ腰に卍あり原叟好の二字

あり鬼面鐶付鉄の鬼面風炉に添ふ浄味作あり

内口 原叟好琉球風炉ハ好む浄味作あり大漆清水

庚名清阿弥

百佗 原叟好板風炉に好む釜飯子口に雷紋あり唐

金蓋百佗文字花押もあり道爺作

達磨堂 原叟号桐院に清巌和尚達磨堂の書

炉と釜とふ次第ナデ口方肩に玉縁ありヲダレ香炉

耳共蓋清巌和尚の書にて達磨堂の文字あり今

本歌松山家にあり写しハ道爺作数二十

角釜 原叟好なく大ブリ肩に玉縁あり刷毛目あり

口共蓋常張鐶ヲダレ茶に覚々斎の文字あり江戸

大西九之清作 覚々斎の文字ハ其筆之江戸よ滞留中の好々浪花竹浪屋伊兵衛裕植休吏の書之

累座富士 如心斎好道爺作鬼面相ハ釜口に累座る

鐶付の上筋二つあり鳳凰風呂に合せ

雷孝 如心斎好浄元作廣口唐金蓋鬼面鐶付如心

斎の書にて雷孝の二字あり後玄室へ好まれ太(フトヨシ)蔭

釜数添ふ○啐啄斎風呂の肉釜に此ハ釜代添えいたし

半紀より後藤へ申出し玄斎雲竜の風呂ハ小雲龍
の釜と魚ヶ浅茅に薩の釜也を我此釜に燕子花(カキツバタ)と
生れ 此釜しらひ峰嫁姉大に 名は付ひら様より名とりて
ダツマ 仕ヶ藩作峰嫁姉ヶ所持の芦屋作鋸の地紋
の釜ありて好む
刷毛目焼口 ありし姉好二代目佐兵衛作なり鬼面鐶
付唐釜一文字蓋山梔子(クチナシ)ツマミ
但しお庵好の巴蓋の通りを刷毛目なり
鉄瓶 ありし斎好宝珠形唐釜フタ二代目佐兵衛
作なり

○釜添品目

鏁(クサリ) むかしハ唐物と用ゆ小堂数ハ又続きある様も次広多
ハ内すぐにかゝるゝ次鏁を用ゆる者に鏁の間と以ふ者内に
見ゆようなど

自在 利休居士内代をとル釘へ荒なり兼る忠へ釣茶
の縁に遠くあり忠へ利休の判あるハ埋木しを釣茶斧柄
あるありハ小サルを何縁にさも左なしあるなり炉乃切口
出ありて自在の端迄ハ小肩ハ九寸より分広間ハ一尺より分
竹の節ハ又隠ハ一尺五寸の天井まで節の数少なく又隠
の分ハ節不足かくまるとも小猿ハ朴(ホウノキ)木鎚ハ茱萸(グミ)小
猿の付緒上の気緒ともより白茶なり

鐶 平鐶ハ四方釜 九鐶ハ雲龍鶴首東陽坊

但し大小とも 常の鐶むしハ唐鐶 真鍮など真の鐶し

五徳 苦ども甚子風呂に切合々の風呂にても透木成
用也 紹鴎因伏らりし五徳と用ゆるありんし五徳の形ハ
小爪 利休形 鴨爪 サツマヤ形 長爪 法連
法連ハ下の輪カイに付を上ゲ下ゲ 自由なり 和州法連
村すを初て造るが故名付るなり

茶志箆 白 火色 利休形 原叟手造形 白 火色 以下同
此始り松屋筆記に始て用ゆる人の名不見ことく

鋂 真鍮の木爪ハ雲龍 鶴首 东陽坊に用也
丸を四方に用也 鉄の鐶の刃ハ小丸 小尻張 大ブリ 鉄乃
手取 釜に用也 ○ 子家此三品を一名に入を以ん秘の

書すを利休所持とハいり是也人歯流まよし此二品を用也
此外に達广書に用也形真鍮丸鈎無斤端り
アガキにいり

透木 利休形ハ原朴 元伯形ハ桐いづれも炉風呂共
にいり山中氏所持に元伯書付大中小二つにいり成とりし

鐶取手 百佗子本松などの鐶とい人

端立 裏鐶に用也透木に無なることなり

○炭取之部

唐物籠 竹組 卜組にいり

和物籠 此組利休形 有る去座峰啄欷好 森覚

籠卜組炭組宗今好

菓の絵縁ある　利休形　正親町帝へ進献の形なり杉の木地
瓢　利休形　手付ハ元伯好
補折炭　一閑張大ハ元伯好　小ハ原叟好
葛桶　一閑張元伯好大きく底に輪なくして涼し　小さき
底に輪ありて浅し
炭臺　檜　利休形なり
羹箸　利休形は鐶手物釜の仕舞仕舞に用ゆ老人好老
る坐愛に用てもよし

○同小道具

羽箒　むかしは鶴　野雁　鳥　鷲など用ひられしも
近頃今は鶴に限る　但し　三ツ羽ハ利休形なり

一ツ羽　利休形菓柄極著によし　鶴手によりて左右共
によろし
ツカミ結　菓箸に用ゆツボ羽十五枚なり
火箸　サハリ炭カヽリなき飾火箸炭取へハ菓柄を
用ゆサハリなき紹鴎の石持写し　椎形　紹鴎所持を
南閑平野によりとす
石盤子（チョウロギ）　利休石持鉄の象眼子家に傳来形
鳥形　角鵞の形なり如心斎好真鍮火箸の表裏の
分るをのぞに好まれしなり
椎形　真鍮サハリ写し
桑柄　利休形金の所を袋に仕込みもあり

鉄張　利休形風呂ニ用ゆ
環　鉄大小あり両振とも利休形今用ゆ形ハ大の方なり
真鍮ニ宗の環なり尤環ニ古風なり
釜置　紙ハ美濃紙一尺一寸ニ横七寸五分を四ツニ折之
同組物　紹鴎所持の写し　本寄ハ竹浪庵ニあり唐臼
のヘダテなり　江岑の筥書付原叟の折紙啐啄斎の
極書付あり筥組ハ紹鴎所持のト組ニおいて利休形
なりト組ハ玉縁あり筥組ハなし
○此釜置子家より江戸冬木氏へ伝へ當時ハ竹
浪庵の所持と成る稲垣蔵す
同竹　元伯好大竹の節の所を用ゆ

同板　利休形筥炭より用ゆ桐の角切なり
○炭の部
胴炭　炉ハ五寸　風呂ニ四寸
輪炭　炉ハ二寸二分　風呂ニ一寸五分
管炭　胴炭と寸法同し
四方炭　炉ハ二寸五分　風呂ハ二寸
○炮烙之部
甕蓋（カメ）　南蛮のツボ乃蓋なり
島物　備前　信楽
楽素焼　利休形なり
同菜籠り　利休形風呂ニ用ゆ

同焼抜　如心斎好長入より薬よすなし

同ノンカウ形　素焼ニ押判あり

同内薬　啐啄斎好炉ニ用也

金入　了々斎好善五郎作黒ニ金入炉ニ用也

○灰杓子

利休形　薬柄ニクロこさし込

少庵形　薬柄ベウ赤火色

宗全形　大判形竹皮色

仙叟形　同じ大形なり

長二郎形　赤楽焼竹皮色延付焼なり

○半田之変

泉州堺田村是焼素焼ハ炉ニ用ひ薬焼風呂ニ

仙叟好素焼すとおく小形押形あり炉ニ用也大

炮烙あり　むりハ底取ニ用也　長二郎作ある抱之

○風炉之部

土風呂ハ金風呂より後なり金風呂ハ

至て古し

透木風炉　むかしハ又能ト恵かし　珠光より始る

但し此灰二文字なし

紹鴎風炉　其の風呂とも以て紹鴎時代より又能始ト

出来るし外の其の風呂とも以てあり是ハ透木風呂なか

火なり上のことさ火窓風呂と同じ何もも雑足　但し灰なき

丸釜風炉　大小とも利休形雖足にて組し灰山あり
尾張風炉　大小とも利休形雖足にて組し灰山あり
阿弥陀堂風炉　右に同し組し灰山あり
四方風呂　大小とも利休形大ハ肩なし小ハ肩あり
雖足あり組し灰山あり
鶴首風炉　利休形芦屋作の名物八寸余の鶴首釜
りにて世好にて無之今の鶴首にハ風呂括好なし大
ブリなり肩あり雖足組し灰山あり
道安風炉　道安好何の釜にも合せし弘不知子家に
無大なりしか唐銅獅巴蓋の釜ハ道安風呂に
合候よし雖足組し灰山あり

雲龍風炉　大小とも利休形乳足組二文字
達广堂風炉　原叟好達广堂の釜に合候鶴首風炉の
如くにて乳足組し灰山あり
面風呂　大小とも利休形いつまの釜にも用ゆ小の小ハ
如心斎好二口とも雖足如心斎好ハ啐啄斎好によし組し
灰山あり

○灰

見付ケ　見込　切落し　山

真　透木風呂　二文字なり
紹鷗ハひとつ　丸釜　四方　阿弥陀堂　面　道安
と同し　大風呂ハ山を二ツ取也

○風呂作者之部

善五郎　奈良住居二代迄堺住居四代より京住し

宗三郎　宗全の人なり

宗四郎　宗三郎の子なり京松原ニ住ス太閤時代ニ
天下一の名代下され今其江戸住居彼子孫も江
戸猿楽町ニ而此風呂を用也　御風呂師なり

○但し茶器細工人ニ天下一の名ハ
風呂師ニて　宗四郎
塗師ニて　盛阿弥
楽師二代目　吉左衛門

與九郎　京師ニて一家の者不詳

善四郎　四代目善五郎の子なりしく紀州ニ二代目と京
叟時代の善五郎とも宗善とも云此二人の外ハ宗入全と書ル

○金風呂

金風呂の始りハ唐物鬼面乳足をいふ則紹鴎風呂
なり南浦紹明持渡り崇福寺より大徳寺へ入
時来ル後應仁の乱(ラン)ニ焼失ス○此風呂の鐶
付鬼面なりけれバ風爐のよしトサカ二ツ
灰を押切なり

鳳皇風呂　江岑の息女と紀州の某へ嫁せられしに紀居
間の墨子の風呂と好まれしなり唐物の茶罐を飾る其
後坂本不縁ニなりて道具ことごとく子供へ譲る

るゝ事や此風呂の事ハ千家に傳りて来る紫羅が薩摩屋
の所持となる今浄益まて写して製す風炉の控經是
臺子風呂の風呂代々まに往々物し其後原叟まて
百佗と倶に其を用ひられしより茶事に用ゆる事に
飾りぬれども紫野富士と製して此風呂に用ゆ候
二文字ありて筒灰なり
琉球風呂　原叟好此風呂口釜代製して用ゆ候
二文字押切之
鉄丸風呂　与二郎作大振之千家傳り　外利休の形
なりぬれども宗旦箱書付あり
同道安風呂　千家にてハ啐啄斎好ミて製せし　去

風呂の道安形より小ぶりし
同鬼面風呂　古き形ありても千家にてハ原叟好ミ寄せサマ
あり浄味作始まりし釜を腰万字灰カキ上ゲあり
板風呂　利休小田原陣中にて好むといひ伝りとも
千家にてハ元伯宗旦好此が始まりなり枚来塗上ゲ
五徳なし透木原叟ハ百佗を合せ初めて用ひし
釜ハ不定

○風呂敷板

大板　一尺四寸四方臺子の板巾を四角にせしす法也
真塗ハ紹鴎好なり当時利休まて製せしハ桐のカキ
合セアラメなし様之長さハ長板と半切なし也

アラメ者好不知一閑にて写しを製ス

小板　アラメ大小松木地花塗利休形　松木地大小あ

啐啄斎好溜ヌリウルミ

丸板　大板を丸く仕たる物なり表面ハり真塗裏木地

紹鷗好琉球風呂甚盛子風呂唐金風呂によし

○面取ケヤキ木地カキ合せハ鉄鬼面風炉ニ

限るなり

瓦板　織部焼大徳寺松庵園中ニ佐久間氏織部

焼の瓦ニて花壇を造る如心斎此瓦板を中清鉄の丸

釜風呂ニ好くと二郎作の大阿弥陀堂ニ取合ス風

呂の名残ニ用ゆれが始りなり古風呂ニ用ひてもよし

又楽焼ハ如心斎好長入焼を製ス薬一方金入唐子

鉄風呂又ハよろしからば古風呂唐金ニ用也

○大板ハ椽手ニて畳の目三ツ

○小板の大サ九ツ七ツの内見合

○丸板ハ五ツ

○小板の小ハ九ツ十一の内見合

○瓦板ハ小板ニ同し

○炉縁之部

炉の寸法むかしハ一尺五寸六寸もありしかど

紹鷗より一尺四寸ニ定む利休も此寸法

と用ゆるなりといへる一尺二寸の炉を九ツ割二ツ

かゝり　七寸と二十まし一尺四寸の炉となり
寸くとかゝ合を六尺三寸の畳之

真塗　利休形桧木地四畳半ニ用ゆ

木地　利休形沢栗し　台目時ハダツを用ゆ台目向切
時より四畳半ニ用ひてもくるしからず

掻合　むかし紹鷗ハ木地を掻合せニ塗用ひられども原
叟の西翁氏ニを初とうちわれしより此の物と無る木地
沢栗ニり四畳半台目ニ限る　但し西翁氏といふハ浪花塗屋
善太郎といふ此席ニり初る之

丸太　利休好妙喜庵隅炉ニ好む杉の丸太面を皮つきく
残りに分を〆て一尺二寸四分炉壇ハ七分ニなり　但し
此寸法ニ限る

松木　啐啄斎好溜スリウルシいつもの園炉裏ニも

閑雲好なり

利休堂　仙叟好杉の木地アラメ是掻合せ広摺ニ限る
利休堂ハ二畳中板の台目ニ用ゆべきとてよろびされ
席ハくるしからず

高台寺　好ミ太閤御用ニ遊ぶ高台寺ニ有しと
浪花の板屋之儀来れ今漆田氏所持地是塗其
蒔絵し　板屋とハ長堀板屋未之儀
漆田氏とハ近江屋久右衛門

○香合之部

香合ハ道具中ニても至て軽き物也人利休百会
ニも香合の書付なし　支坂名物もなし　名物之
堆朱ニ貝ニ限る　○張成　○楊成　○周明

此三人ハ宋朝ニて堆朱の上作と云

張源　錢琇　呂甫　金甫　王国

王賞　印堆　此七人ハ元明の間の人時代

定めがたし前の三人と合せて堆朱の十作と云

存星

彫ニ星のやうなる物有て紋ニ存星と云又存清と

書ても人の名とも云説もあり時代不分明なり

但し東山殿飾書ニあるハ存清とあり

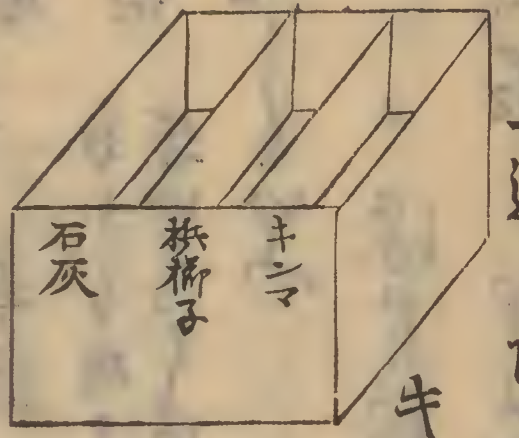
堆黒　唐物ニて新古あり十作の内ニもあり

緑紫紅花　堆朱文字の通りニて十作の内ニもあり

蒟醤（キンマ）　安南國ニてキンマを入る器なりキンマの葉ハ

檳榔子（ビンロウジ）を包て石灰を付て合後ニ用るよし未地とカゴ

地と二通りあり此器ニ似よりのをキンマと云



キンマと云ハ塗物ハ是より云

安南辺ニて人来る時ハ日本の煙草盆

と出るごとくキンマの葉ニ檳榔子を包て

此通りの器物ニ入て出るなり

コマ　高麗（コマ）と云事なるべし舶来とも云ハ非なり

青貝　唐物と琉球と二品あり

象牙　唐物山中氏ニ紹鴎所持宝珠形あり

○青磁類

雲鶴　至て古し

蘭牛　至て古き物なり名ところ々ハ雲州侯淀侯山中氏ニ

作り角まし蓋の上ニ牛の浮たる所ありて白泥掛

又ハ白呉洲なとあり

桔梗　七宝　朱氏　七宝　一葉　七宝　朱葉形　七宝

元和慶長の頃七宝とて唐人の持渡りしを七宝といふ

蜜柑　七宝

犬鷺桃　一種の桃桃の上ニたゝ鷺と向ひたる児持たり

開扇　七宝　朱魚　七宝　獅子　七宝　角　七宝　丸　七宝

裏白　南京ニ絵まて内匠姿いろ／＼あり　七宝より時代若し南京ニ

絵ともいふ

○染付類　古染付　虫喰　新渡

屏風岩　甲ニカゲヒナタの桔梗形あり茶碗ニいふ

蓋し野ニ二足とあり横芒(スヽキ)の描たる物あり

張子牛　角甲ニ外牛の染付横ニ紫草蔓の描たる摸様

作り牛の向きニ左右ニあり

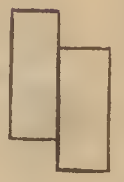
荘子　角隅ニ浮紋まて蝶あり　横織物あり

水牛　葉入角水中より牛半身出たる上ニ月あり

繋牛　葉入角杭ニ牛繋てあり

飛龍　葉入角ニ飛龍のあたる

引捨牛　作りて牛まて縄長く引捨る

拆木　　甲も横も織りあり稀ニ上ニ文字あり

亀　亀の形まて頭おし延てあり　浪花布屋加賀清兵衛

桔梗　桔梗形脊高し　横ニ望ちしあり　桝屋源右衛門

爲持なり

兜巾茄子　四方胴ありて茄子よりカゲヒナタ模様あり

塔屋善玄清爲持なり

松川菱

結文　大小あり小ハ玉章とて横織紋上に山水楼の上に碁打あり小なるハ紫なるを結びめなし千家所持

大の方隠流の書付あり

鞠夾（マリハサミ） 　織紋なしヤラウ蓋

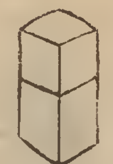
辻堂　角四方胴屋根の上に松葉と木の葉の紋なしあり下ハ角なり

菱牛　菱形浮模様の外牛あり火焔牛ともいふ横織紋なしあり

菱立る　菱形甲に立るあり花下に草あり横紫平菱の紋ある模様あり

削ぐる　枯木に削ぐるの模様あり

搗牛　六角甲に外牛と散模様に寶尽しあり○是ハ搗にありし桃なるか牛放桃林野のことなるか名

搗杭　　竹の節なしあり

分銅　浮紋ありて甲に小さき分銅あり

梔子（クチナシ）　甲に梔子の花の模様ある浮紋あり横に織紋なし

塔螺（タツホラ）　模螺　二之瓢　丁子　桃　扇　半開　皆展

○詳瑞（ションズイ）　地名なり唐音チャンズエンの轉語　五郎太甫ハ伊勢津の人なり

明末に祥瑞へ渡り焼物とも多し甚陶器すき
五良太甫
呉祥瑞造　此ごとくの文字ある五良太甫焼
なり文字なきハ只ハ焼なりを掛時代より古し
一説に呉祥瑞といふハ人の名なりと五良太
甫ハ捻極と彫盞を入るゝ者といふ説あり
○但し文郎右夫と書けハにいし五良太甫
と云なべし日本へ陶器渡明人の五良太甫に
送りし詩あり　此詩伊勢松坂某の家に有
瓢箪　丸の内にあさしと多と云ことの絵あり其外
織紋なし
塗瓜　織紋なし倫子形菓あり　菓二枚高もあり　ヤロウ盃なり

撲瓜　塗瓜同様の物まそ塗ニウ子リありウ子リ乃
なきを道具屋にて枕といふ
蜜柑　織紋なし上に菓あり或ハ上に疵
瑠璃雀　惣瑠璃にて羽根おし出し口の宍通る
鴨　無しに鴨の形羽根の留に詩あり
茄子　未見
檑杭　漆付の檑杭同様にてヨウ入上にツマミあるもの
兜（カブト）　あり倫子形織物なし書分ヶ
下丸く薄手にて蓋兜の形に似たるなし　遠州輪遠
二ツあり但し浪花塩屋庄次郎所持なり　号法華
瑠璃扇　扇の地紙骨半分あり地文の上へ留りと見ゆる

物あり青海波のかきあり

○呉洲　地名なるべし

松川菱　三階菱にて中に人物樓に漁樵左右竹なり

周茂叔　蓋入角探千にもたれ人物あり水にチヨホ〳〵と

しかる物あり蓮に見えるなし

朱瓜　松川菱の模様の通りにて形朱瓜なり

菓蟹　菓の形にて上に蟹のかきあるハ多し

有馬筆　小角筆後に漁樵左右竹上にゐて小さき人形あり

狼香　朱瓜程の大さにて狼香の形なりかきあり竹

○赤絵

古赤絵といふハ至て古し丸くして上にツでこあり

横に筋ありて萌黄にて蓋の模様あり甚緑形

一定せず

○呉洲赤絵

定まりたる形ハ蓋入角牡丹と花との模様あり

蓋萌黄色にハ萌黄なし　横寶定し大中

小にあり丸もあり

○紅毛物（オランダ）　定まりたる物とてハなし

○交趾（カウチ）　安南と同国にて交趾ハ古名し今ハ形の名なり

角牛　蓋入角の惣萌黄甲黄にして牛おきて浮上る三

井山中高家に所持なり

布袋　衣黒花色形丸くして仰（アヲノ）きて面と後と人形見

狸　狸の形にて猴を抱く紫黄萌黄の浪に尾ぶし
黄なる所もあり
康　紫身ハ萌黄熨黄茶もあり
犬獅子　熨じを黄と白檀とあり熨縁萌黄尾乃
方黄茶あるもあり犬判の形様あり
手遊び獅子　犬獅子より小なり白檀黄萌黄紫海
ふかなり
大亀　甲に亀甲あり紫萌黄黄浪ふか形朱地敷の
亀と如形なし
錢亀　甲白檀身萌黄黄と黄と両縁を左りへ
巡らると黄虫とあり

笠牛　牛の上に笠あり牛黄にて笠萌黄又熨萌黄と
笠むらさきもあり
二之龍　小判形の内に升降(ノボリクダリ)の龍あり白檀と萌黄と
両縁又蓋黄なるもあり
蟹　弁萌黄蟹横にて浮かせあり
柘榴(ザクロ)　丸にて甲に蔕(ヘタ)の縁なる柄にて筋二すじありて
其内に麒麟の縁なる抱鳳凰の中なる柄あるを金茶
なるといふ全花なるにて蔕(ヘタ)なし筋にてへキリの内紫地
萌黄花黄又黄クモの筋地萌黄花黄
烏帽子(エボシ)なる　鴨の形乃縁にて大ブリ形エボシに似たり萌
黄桐根白檀なり

霊芝（レイシ）手　霊芝とくはへて居る手し又芝白檀黄

黄手　黄ある手あり肉根白檀

音呼（インコ）

大小鴨　惣萌黄白檀と黄とも又紙もあり

長角　薬入上ヶ梅と手にあり惣萌黄へキリの内紫本

檀よりあり紫紙もあり

福禄寿　何れも丸く此文字あり惣萌黄文字の所

黄よ朱なるもあり上品なり

○白高麗　形定まらず

○和物類

瀬戸　利休所持の茶入にノヒカウ字しあり　所生造なし

本哥は京数家原清兵衛所持なり

黄瀬戸根太　利休所持一翁宗守持来今雲州侯にあり

あり焼餅平丸手の押形あり手の撞形なるもあり

○志野　形定まらず

○織部　同

○伊賀　同

○信楽　同

○楽焼之類

伯庵　光悦手造と原叟左入と途写を出品付あり

蛤　宗全好金満よ小手

鳥　宗全手造り宗純書付写しあり

舟引　赤　如心斎好右入作
木魚　赤　如心斎好右入作
總(フサ)　赤　如心斎好望總なり
地紙箱　元伯好赤まを甲ニ薄(スヽキ)の穂の彫模様あり
鱓　如心斎好手遊びの金魚の模様を脊中尾ヶ所を蒔る
伯楽　如心斎好夕こハしと赤と黄模様あり江岑好の通
なり代蓋身模様ニなる

○手造之事

手造りハ光悦より始る光悦茶ハ一ノ二カウ茶
と自分茶と黄模様あり手家ニてハ江岑より
始る盛ハ宗旦ともいふ

○時代蒔絵之事

聖武帝時代ハ奈良の都なり
保元時代ハ　崇徳院御時代なり
鎌倉時代ハ　頼朝公時代なり
鎌倉尼公の十二手箱といふ拵ハり丸形大二ッ小二ッ長角
二ッ角二ッ鏡の菓大二ッ小二ッ合を十二品なり当時世上
ニいう吹寄楓ハ世頃ニ草の蒔絵之十二手箱の内ハナしを
名物と云○吹寄楓ハ浪花桜色絵と蒔絵ハ今も近江屋
久兵衛所持也頃ニ草ハ併法屋又兵衛所持なり此箱乃
カケゴを乱箱といふ始りなり
東山時代ハ　義政公時代なり

信長時代　太閤時代
室町時代より太閤時代まで八皆蒔絵物なり
白粉解　元来婦人の手道具を仮(カリ)用也
紹鴎所好白粉解　黒塗胴合せにて家伝の朱文郎作江岑の
書付にて當時白山氏所持なり　白山氏ハ炭屋安兵衛事也
利休所好白粉解　利休好盛阿弥作黒塗金粉にて銀梅
鉢の大小七ツ浮く
道安所好白粉解　黒塗アゲ底盛阿弥の作にて家に所持之
天然の写し数百あり
少庵所好白粉解　黒に金粉にてカゲの筆甲に二ツ合口と
底とに数七ツにて盛阿弥作なり

コボレ梅白粉解　紹鴎時代よりの者好と不知といへども利休
判ある山中氏所持の家なり書付出来なり
掛羅　江岑好裏金ナシ地外黒金粉にて梅月の模様
柏楽　江岑好内黒外溜江岑書付に利休段といふ浪花
津屋荘三郎所持なり
三日月　黒真塗元伯好胴合せ
橙(ダイダイ)　東福門院御好内黒外溜又内黒外金溜にて
根来(ネゴロ)　信長時代までの品なり其後新製ハなし
鎌倉　頼朝時代より後に奈良まで写し出来たと大仏前
といふ此所にて似寄の物製す
○一閑張物

兜巾　元伯好千家伝来當時山中善五郎所持なり
其後啐啄斎写し三拾有
烏帽子箱　元伯好本歌ハ京都京屋町八文字屋庄右衛
所持なり
梅鉢必粉解　原叟好本歌ハ竹浪庵所持　竹浪庵ハ稲垣休叟の事也
ヲキ上り　原叟好外漏内黒久田宗也病気全快の祝よ
原叟好也これヲキ上るといふ之也當時山中善作所持
桃
元伯好内外黒椎絵なし大徳寺中聚光院の什物
仙叟書付なり大ブリ也但し内朱甲ニ花と葉と金粉
まきなり元祖一閑作まで好ミを不知啐啄斎の書付
なるを廣圀五三所持なり　廣圀とハ加島屋也

三日月　小の方内朱外黒桐合元伯好本歌ハ今日庵ニ有
中形ヒサシ蓋内外黒ハ宗全好千家所持大形内朱外黒
桐合ハ原叟好五十之内ヒサシ蓋なり又宗全好の通り是
蒔絵書きもの啐啄斎江戸去座武蔵野といふ
結文(ムスビフミ)　洲濱(スハマ)　瓢箪　梅鉢　蔦(ツタ)
何れも内朱外黒原叟好一品数十づつ其五品合て五十
なりしを世人五十の内といふ
掛羅　原叟好といへとも不分明なり
○木地物之部
葭鳥(ヨシトリ)　妙喜庵の松乃木を以て製し左近形原叟好乃
老松の割蓋と同木なり原叟書付数二十七又別ニ残

木まて天然写し十二にわり合せて又十よう数を多まよ
蛙蟹鑫彫にわり甚ぐはしなり
亀　交趾の大亀の写しなり如心斎好木地松の木天
然出付ける数多ありとゝ
桝子　千家所持唐物と花朱一平なりうつし来歴
此一平なる天然の名業なり
桐　了々斎好乳桐とて松の木地に因宗全塗級の写しとぞ
ブリく　原叟好一燈宗室好を出る
玉　原叟好如心斎好を出
竹　如心斎好根節まて造る引物なり
○一閑ゝ事

一閑の元祖を朝雲斎金剛山人とい又唐人なり
宗旦時代後よ笹屋とかつと云者原叟時代し
号く後よ天然の名業花朱一平お続し今の
一宗株を買て花朱氏と名乗る唐人一閑より
花朱氏と名乗る中より五代よなるよし

○薫物之部

伽羅と用るも古し　仁明帝第七乃皇子
薫香　八條宮本康親王香癖ありて黒方侍従の二方を製し
親王より兼和年中の人之　炉よ用ゆるを利休より始る
白檀　風呂よ限るなり
漬干　以前茶人名物又ハ風呂のかきまよ用ひられど今ハ不用

伽羅　切類の寸法二分四方を口切入る事　二炷づゝ焚後の時に四切範なり。○名物の香合又ハ綵類の香合ハ炉風呂ともに伽羅を用ゆるなり

○傳に曰白檀ハ艸　沈香ハ行　伽羅ハ真　伽羅を用るハ香合綵類の品又ハ名物の品主此取に用ゆ炉風呂とも初座綵類の香合なれバ後座よりハ外香合に替へ用ゆるがよし　名物ならバ初後座ともに用ゆ組過　炷始ハまゝそ炷が主に行ふしらひあるべし

○花入之部　唐物金類

フロリ　細口輪香臺

撥底　細口輪香臺なし

薄端　廣口をいふ

把綿（タバコワタ）　把綿の形なり

角木　角のリウゴ

野燒籠　銅張燒籠の形

柑子口（カウジ）　口造り柑子の形よりなれ

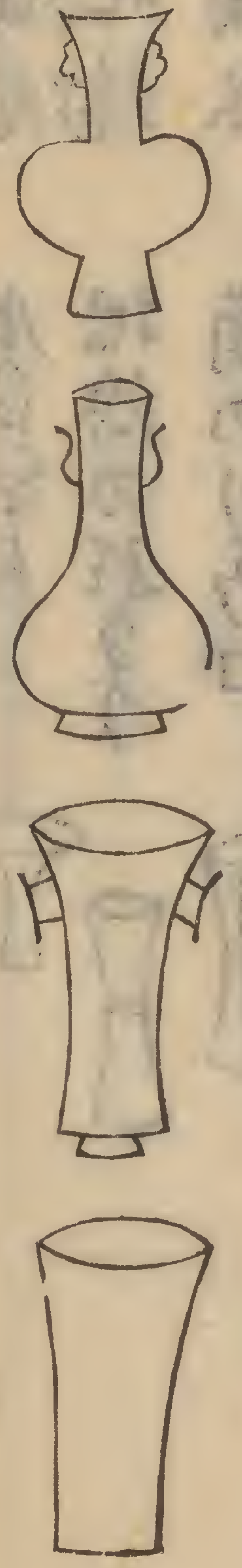
經筒　伊三郎まで これを写　往古経筒など入れし筒なり

砂張舟　珠光所持と貨狄舟とも云　珠鞁所持と松本舟といふ此二種茶人砂張舟と用ゆる始なり

○珠鞁ハ珠光の弟子なり此器奈良古川源三郎所持なり　松屋のなり

西瓜金　西瓜色の金銭いふ

モウル金　宣徳時代莫卧爾(モウル)國の製
宣徳金　明の宣徳時代に製する物にて
○香爐類
碪(キヌタ)　碪の杵の形に似し此手の品代通じて碪手といふ
天龍寺　天龍寺什物の香炉の手をいふ
七官　人の名なり前に出れ
中蕪(カブラ)　逆蕪(サカカブラ)　蕪なし



桔梗口　口桔梗の花の形なる物をいふ
竹の子　竹の子乃形
象耳　耳付象の形
鯱耳　耳付鯱の形
サヽゲ蔓　豆に筋あり
経筒　経巻を入れし筒の形　金の紐よもあり
浮牡丹　一種の物七官よりハ上手(テ)あり
ヒシホ手　ヒシホ多なり
飛青磁　飛色の紫所々にある物をいふ
天目盞　茶碗の天目の手
縄簾　井戸　粉吹　此三種かあれど徳利の形なり

○刷毛目　○三島　○宋胡録（スンコロク）　○南蠻
○朝鮮　○島物　○染付類　○籠類
○和物花入之類
○瀬戸　○黄瀬戸　利休所持之立鼓あり　○信楽
○唐津　○志野　○丹波　○備前
○伊賀　○伊部
○竹類　并　瓢　籠
一重　尺八　太閤小田原陣のとき利休居士供奉して其陣中にて作る夏日久し或時（アルトキ）韮山（ニラ）の國伊豆城内より大竹を取寄る手紙竹を見て文を添て其守将北條美濃守氏規（ノリ）之を以て花入二筒を製し其一筒を尺八と名付て利

太閤へ献じ（ケン）一筒を一重切園（一書に園とす）城寺と銘して少庵へ與ふ一説に竹の花入の始なり園城寺も當時雲州侯御所蔵なり
二重切　利休二重切より上り亀の蒔絵を製して正親町帝へ進献す
輪なし二重　利休所持あり
三重切　原叟上田氏まで始て製す此景其地雪月花と書付けり元来八生ヶ瀬より切なり（當国浪花淺宗よりあり）
置筒　庸軒始なり千家までは原叟始て製す子鶴と号す西田氏所持（浪花平瀬）子家所持は壺水の蒔絵無銘なり如心斎是を二十本製す但し原叟八

銀の蒔絵天然に金の菊絵あり

酢(ス)筒　篦(ヘラ)筒　尺八にサカ竹酢(ス)筒にスグ竹両用ゆ

揃ともに尺八と云如心斎好を酢(ス)筒と制せし篦(ヘラ)筒の通

まゝ節筒あり篦筒に節あるし

此ハ酢筒ハ節所に篦筒ハ通

置尺八　如心斎好虫喰究なし千家所持孫伏檗(ノクキ)

舟　元伯嵯峨(サガ)家にて筏(イカダ)の流るゝを見て好む

丸太舟　元伯好並後節限りに切るあり原叟此舟に

左右に耳を出せし

太鼓舟　仙叟好根の節合の中にて切る床の吹

指り掛る

稲塚　如心斎竹の根節よりて作る本千家竹浪庵にも持し

瓢　掛る利休云ハ元伯

窓切之　仙叟好

底へ板をつく

後に如心斎写し数の物あり

籠　竹組　置ハ仙叟好是へトの手代付すること宗入全好

是と津作のすりするハ覚て啐啄斎籠ハ宗全好之

ト組　蜂籠ハ宗全好トの手代津作にすハ啐啄斎

竹組よトの手を付るハ宗全好なり

藤組置籠　宗全好なり

○金類　写し物

○楽焼之分

モゝ烏帽子(エボシ)　赤楽花入好志主没

舟　黄葉南端おし上る宗全好之此外写し物にあり

○同敷板之事

矢筈　利休形木地掻黒真塗

蛤端　利休形桐溜塗啐啄斎好ハ松木溜

丸香臺　利休形桐の掻合啐啄斎好ハ松木溜

棗花臺　利休形長角足ニすりしにあり千家ニ所持

此ハ啐啄斎稲塚の開きの時用ゆるよし

○切溜

杉曲物　利休形内ニ(井)井の字乃花賦(クバリ)にあり足削(ケヅリ)

木十文字

竹　原叟好足ケヅリ木の十文字

楽焼　薄端金入タンハン葉原叟好

花臺　杉足付利休形　菊組宗入全好

水次　唐金大壺利休形　小ハ原叟好

小刀　棗柄利休形

鐶　黄黒之利休形

錐撥(スイヂ)　東山殿御好黒塗石畳の金物座上下ニあり

茶入の大小ニ従ひ折釘上ゲ下ゲ掛手ニ用ゆ右床張付

あれバ是を用ゆるなり

茶道筌蹄巻之二終